

サンゴが震えた日）核と異常気象

・怖い自然からのシッペ返し・

漆黒の宇宙を背景に浮かぶ青い地球、広大な太平洋には雲が流れ宝石を散りばめたようにグアム、ビキニ、エニウエトク、南太平洋のムルロアとサンゴ礁の島々が連なっている。現地と言葉で、大きな秘密の場所」ムルロアのサンゴ礁に衝撃波が走り、青い海が「瞬ののち白濁して盛り上がった。フランスの地下核実験の爆発のその時、サンゴ礁が震えた。

かつて一九五〇年代を中心にビキニ環礁などでは大気圏内核実験が続けられた。ビキニにおける水爆実験では二百^{キロトン}離れたロンゲラプ島に住む人々は島の西でさく裂した水爆の閃光と東の空の日の出とふたつの太陽をみた。

そして爆発によって空気が震え巻き上げられたサンゴの粉とともに死の灰が降ってきた。この付近は北東貿易風帯に位置しており、死の灰は南西に向かって流れるのが普通だが、この日は逆に西風に乗って島を襲いカツオ漁船の第五福竜丸をも直撃した。

当時、核実験による放射能汚染が地球規模で拡大し、神が作った空気が、つくりたてのパンのようにかぐわしくおいしいものだが、原水爆の爆発は始まってから、もはや空気が信用を失い、疑いながらすわれるものとなった。空気にはもはや詩がなくなった」と荒垣秀雄 天声人

語 一九五五年朝日新聞）をして嘆きが聞かれた。

大気圏内での核実験が禁止された一九六三年の年は、皮肉にもそれまでの恨みが、一気にでたような地球規模の異常気象となり日本ではサンパチ豪雪となった。成層圏でも見事な突然昇温がみられ、数十年あるいは数百年に一度という大気の大きな偏りによって地球の回転のスピードが狂った年となった。

ムルロア、ファンガタウファ環礁とあわせて過去三十年で百回にもおよぶ地下核実験が行われ、いまなお土台の火成岩の岩盤に爆薬をしかけてサンゴ礁を震えさせる目が続いている。

空気からも信用されなくなり、海のなかで地球環境の番人の役割をもつサンゴ礁からも信用されなくなってしまった。いずれ自然からの厳しいシッペ返しを受けるのではなからうか。